

# 「命」実感 狩りに魅せられて

## 22歳、川根本町移住 充実の自給自足生活

山間部での狩猟生活に魅了される若者が県内で少しずつ増えている。その1人、川根本町に牧之原市から移住した渡辺美優さんの22は「自然と向き合い、一つ一つ生活を丁寧に送る。自分が生きていくと実感する」と話す。野生鳥獣に悩まされる山間地の現実や狩猟で生計を立てる難しさを実感する一方で、間もなく1年となる狩猟生活を満喫する。

### 若者向け情報発信に力

「木が削れ、土が踏みならされている」。10月中旬、渡辺さんは猟仲間の松浦あづみさん24と入った同町の里山で、シカが見つけたとみられる木の道を見つけた。スコップで土を掘り、直径12センチのくくりわなを埋

め込む。「ここからは動物との化かし合い」。近くに障害物やえさを置き、わなの上を踏ませよう誘導する。毎日様子を見に行き、捕獲できたときは達成感がこみ上げるといふ。自給自足の生活に憧れを抱いていたという渡辺さん。静岡文化芸術大(浜松市中区)在学時に川根本町の地域活性化に関わり「理

想の場所かもしれない」と在学中の2021年、移住を決意した。同年から町の地域おこし協力隊として勤務する傍ら、地元のベテラン猟師殿岡邦吉さん(73)と知り合い、狩猟のだいご味を教わった。

同年秋にわな猟免許を取得した。これまでに捕獲した鳥獣は二ホンシカ3頭、ニホンザル2頭。「シカは捕ってさばいて食べる。シンプルで理想的な生活」と狩猟とジビエ料理を楽しむ。一方、田畑が動物に食い散らかされ、狩猟者が不

足している課題も見えてきた。「猟師の収入を安定させる必要がある」と殿岡さんの下で狩猟の腕を磨きつつ、ジビエ食材の流通先確保やブランド化を見据える。

渡辺さんと同じ大学出身で、浜松市中区から移住してきた松浦さんは「新型コロナウイルス禍で働き方や仕事に対する意識も変わってきた。大学卒業後、猟師になる選択肢もあると伝えたい」と若者向けの情報発信に力を入れる。  
(政治部・尾原崇也)



シカを捕獲するためのわなを仕掛ける渡辺美優さん(左)と松浦あづみさん  
=10月中旬、川根本町奥泉

### 県内 20、30代狩猟者増加

野生鳥獣による生態系への影響や農作物被害が深刻化する中、県や地元狩猟者は新たな鳥獣駆除の担い手として若い世代に期待し、参入を後押しする取り組みを展開する。

県に登録する狩猟者数は2020年度末で延べ7802人。このうち20、30代は1148人で、15年度末の775人と比べ約1.5倍に増えた。狩猟者全体の年齢構成比をみても、15年度末11%から20年度末14%と上昇した。

狩猟者数は近年増加傾向にあるが、農林地域周辺で有害鳥獣を捕獲するために、農業者がわな猟免許を取得するケースが多い。県は野生動物が過密生息状態にあり、適正数を維持するためには銃猟免許所持者も含めた専門的な狩猟者の養成が欠かせないとして、講習会を拡充してきた。

20年度から上級狩猟者向けの講習会を開き、21年度からは学生対象の講習会も始めた。女性の参入もポイントになるとみて、女性の体力でも可能な狩猟方法を指南する。